雑兵物語

乾

和書門
類 一七
號 三四三
函 一六
架 一〇
冊 二

247
内閣文庫
和書
類 一七
號 三四三
冊 二
函 八九
架 九

武備兵法

兵法
五、三

内閣文庫
番號 和 17343
冊數 2（1）
函號 189 247

189-247

官許

弘化二年
乙巳十二月

雑兵物語　全二冊

東都　不識軒藏梓

日本政府図書

雑兵物語上

鉄炮足軽小頭　朝日出右衛門

杖をつきたる役目につて推量でもかな違ひ見次
此事をきかれよ云迄もなけれど首に
引掛た珠数玉の結目を見て真中へ当るや
うにくはえてしめされへ胸の通りにおまさいまだで
鉄炮をたゝきまはさせんがため又常に角に向ひたて
くやうに早くはなしめさるなどつく事はし
おきをいはち放てゝひきがねとんじき捨たんやうに

浅草文庫

たかしめさるべい御定のごとく鉄炮ちかしく時
でも打発し袋を捨めさるな二つに折て槊杖は
二本でも三本でもなめかし袋の口からはさみため二本
右の脇から後の腰乃まん中へはさんで置べき
ことよ笠小さしたらば笠小さをうつてわなかん
筒の横へはしなさるな味方の人の目がつぶれ程
うしろへはさしなさるな敵間の遠き内はかれが
渡せ筒の早合をとめるな近くなつてわつ
はむるに随て胴乱の早合を取出しなされよ

いそげば早落もしつて火縄のさきをやうやうすはまば
火もうちはなれで立消もあるもんだ若火もきえ
るもんだならば替の火縄を沢山な程に割胴乱は
玉を込ならば穴に太槊杖を杖の中へはさんで
来るな程にむさと込て持ちたいめばあんだる黒いが程
玉二つもはつこむ筒の先に立た人がたちじし時を
その次は火縄をたきさみめさるまいぞ程ついとはけてもはた
一町めくで駒から指当いべい又敵が見えなれど
てから鉄炮をとかはばはや発させるな玉薬をはさいんで

かけぎはをまきよ馬上の敵ハ先馬をねらへ以而
後ハ人をおとすべし又時によつて家の頭者ハ
打おとしむなき馬にして敵の人数をまくらせよ
事も有べし扨ちかくおつつめてハ左右へ分て
鑓の勝負を始むべし胴乱で玉を込るまで
ふかいハりん抜て鉄炮を腰にさしてさんで刀を
抜て敵の手足をねらつて切べし甲冑を着て居
るものハかんべにうすのやうになる者ハ又敵間遠
くハ筒の内を拭ひ若も洗ひを吹まくして持の時でも

半分だくハ玉薬をふんの鉄炮を口で飲ざる又かひ
小働で息が切為に打飼の底に入て置た梅
干を出んなしてちよと見るが必ず喰ても志なれん
ものぞ喰事ハ決して無用だ見ても喉がかわく程に
命のあぶない時ハその梅干を見る大切にして置
息合の薬にせんが出してたくわえて置くべし
あれ其梅干をとつて喉がかわく時ハ
是死人の血でも又ぞ泥水でも上水でも呑く
はしく居るものハ梅干ハ陣中つつて渇ぬ事に胡椒

粒を在陣中日数程ハ入ものにて長もちし朝一粒
はかじまへハ先へ出してもひのあるなれども祝ひに
是ハ梅干をはちうふてかひみ入ござれバ又唐辛
成おいてはこれにて尻のうる尻先近くまでバせかへ
なれどもあながちきものハ喰るによかんござれバ
ことならして目をしんぼハちはあるる目玉が
がひらりはくござる物

鉄炮足軽　夕日入右衛門

今日も川越が有ござるぞ胴乱を首にかけて

彦六もおりしかやはお具足を着く口薬入の懸様ハ
どうもなれて常に鉄炮持もしく時の鑓の浮笠をとり
かねてから後緒を首へ引受ござれバくと此まゝと緒が緩
くて掛られぬ物が為に緒が疾ち切て首に掛て胸い
付たくても付る事とするんでおりしかやはりあまき
ても鉄炮を打といそれまで又早合の薬ハ玉をどうも
おかれて居るハ為計でもなれバ長陣に野にも山にも
始めござるものハ大勢の内に満もし　これにも当らぬ
もの有べい時に早速其を待られる所へ胴薬一匁計

のきく火をときはおまへハ毒気を早くきかんのくわじ
持手もおそれはきまへハ持ちなからものぐさぞ

弓足軽小頭　　大川深右衛門

先弓を射る者を首として拾挺の備図は
是れは其中へ當る屋うにくゑなし矢さまハ
胸の前てうにて玉らハまいバ弦に引懸て弓ハ
射ル故なれものど、ある又弓ハ修行がなくしハ能
なれども弓ニ弾鎗とハちくさて射ニ手敵
間遠ほ内を鞭乃矢ゐなれものど、おほて波を
とかいて近く成て鞭は矢ちどしぬけまいい
かなし次惜の間よりかへて射屋かし次ち

の事分もくるハしくハ能く的は射矢さるより
一倍も出さもつと思ハるく射めさまハいかゝ手ひか
かはくハにかる矢射捨はし事ゟ鉄炮二挺の間へ
弓壱人ほどく実ニしく玉薬込乃間をもちきしき
矢をもまハ弐挺の鉄炮と壱度ニ矢もどしきお
さんやうに間とはじ事矢さましいうもなし
このれなれ程うりもくおほつ矢屋い射めは在
乃とてく射めさうハい在へ分まてる事もなく
あん時にもをらへてたへらしいて敵の左乃ち

ちぢまり迫ば右の方を防ぎかくひきのける馬上の
敵を先馬を射させきん以矢種はきんとすれ
時ハ一ツ矢をうけは矢はゆるしかぶして六寸
は矢は十匹分一筋ずつ矢はかなりてむさと射矢は
むなし死で為いと、おもふ時は鑓をうけて近くよる
はあらもそき間を伺ひて放ち矢せきよあらず
鑓は頬を下散のもはずれをむ首は打つ
て突あされいと後を刀でも胴先にあてる勝手
次第にぬん揃くよりのしと抜くほとる切よ

甲の真向きまは双がはらかきくなまのくあの
ては切ぬものある又骨をも透ぬけまでちらく
小押せなきそはし小刀なりとも持くたる
の立廻きなんといふ事もあるべきなのぞむ
射ぬは一つぬあよ矢さるれ

弓足捌　小川滝左衛門

明日弦をちるかへるぬ時ち流くり弦に打目は
はあぬち一放ちたちまちあまいをのつきまさ
弦を透分入さ弦ぬが打目ちは流くいをつひき

まは二放(うちはな)ちともはじくれどうつきまはしぬるぞ
弦(つる)よわがひろがるときえ替(かへ)の弦を腰にていふ
小指目(こゆびめ)のほどなんやうにぞ　弦をたしなむ也
又は弓をほかにしても六尺あまりが五尺まで二
藤(ふぢ)を巻(まき)て間竿(けんざを)にもちたる家共の取も
みん道はもし間竿(けんざを)は家道の時に弓の
弦を下(さげ)あしく間(けん)をうたぬは道にて尺八度(ごくふげう)の
弓はやしんと此弓は事もめん道は取

鑓擔小頭　　長柄源内左衛門

各の腹中にあるべい事くめぞ、おれもひや勢と
お釋抉ふもお経見の兇身ども黒鉄ハよわ掠ぶ
とやかや事ゆ陸ぶ鎗の勝負ゟもずゆうなん
先かゝる鎗を奇さやを胸板へ入ながさん長き鞘ハかゝる
なのうしろ腰ヘ引たさんぬらよかゐと存
先鎗を肉てくもまやく勝負のむし鴻るを清
侍衆の鎗かゝらぞそ摑ゆる鎗鍼突ちんぐる也
計ま思ひあるさるれ各心をとつかしる手積先

の操ひやもやうに拍子を合せうかめ上やりに振る
やうみたまめさまは必ほとく座れと思ひふかさ
なれ持され君人武人共出合の時もよし
強敵おほく持ろは敵の時は拍子を操へてう
はるゝ外れなんぞ扨又敵の指物とめまお音
まやうはしくよみる座しと存る馬上ろ
敵をば家人より早くするれ衛と腰を詰めて
孫おとにそいとさく孫を津もなきまでよ敵と
おのれ崩し一筆後されむとく一町よ余遠くは

追かゝる事いとも深きものなりと思ひし簇や上帯
を一所におひのつゝけらけし二色を能く精銭
出しても似たりわかやらは上そのん座ことなやしが
如何有べいも辜きなんは又かくり目釘に必銭
はけく恐けあんやうに真見きまきい滴ちろ胴
今なくは目釘の恐ろかあれやうみ系擦り滴
いしめさまは熱じぬ法御持鑓がけきい江戸
思ひ出でいは御道具もものとく言る絡金ゆへりて
是りこそもそれど抱へては頭りものなる所にあ

我役りハさぞなれ殺鑓をおのゝ傍に鎗をぬ
足くわ足次さうひろく歴くの侍分と智事
ハなんぞせんかな羅うし能く腰骨をはなくして
おく事なれやうに覚悟をしろ又は持鑓の
はずれハうすれてしく我国に立くめらばうろまへ
者の腰をぬを同前のかな羅ハ後生一大事に行う
かはいゝろ働らかいう手柄がぬ捨此二色の目を
とよく/\ばてゝ腰へはさんておきやれ

持鎗擔

吉田左衛門

銀拵の大持鑓を引担ぬ所に草摺くゝみむらい
うち銀は上洋猫の金をさいはさ札ぬいゝ成
死罪まうかぬあたまも匿いどそも咎人かな程に
敵を一延のほやをふれと見ても所か馬武者立継
ちし庭のして来る命を線抜して/\馬の
古腰へはさんかな事ハ洋輪がひつ柄の手
鑓をぬく匿いと見はぬ事は塩首とるかつ
二の鎗をとる比腹手めはきのもしになるさぐ
酢桶かなとく生くゆしくこゝまでしるおそ

しもさかむなひくかゝり鎗をとをつらぬく
理非なきまで無念なれんざついれんともに
扈いとおもふ所に仕合とおもふ敵が一疋かけだ
鎗をもつ々唯今鎗衾と眉ゆとうでて
右のこれ目玉のうへ血さかなまらいぬ行目にひ
ろちんざつるみ家二ヶ所たちよられ通びちいが
来る所へ先は幸なんざと思てとびかゝり
このし突ありはしもしろ鎗を突べいと
おもひ右わ方より鎗の柄を追とり越し石突乃

かしこぎ骨乃なんか所と同利しく芭蕉色れと
たりをかなむ突をいまいば先へ五寸斗はらん
出しをさぐつてころんざ仕合と鎗を持
く孫満ぬ々残は又馬や扈のとにろ
つしく鎗を抜とひいて所く馬がちにる
其のま家人もゆいきら技乃落く死でゐく
所へ孫くひとかく扈しにそのひある大服
指首をかく取ひぎのゞ奥に
みは小服ゑそとものも其もちなたん給し首を

拵くさびがくだとくうの刃のひらみれども胴らさあ
庵いとおもつく馬へ上乗(うはのり)のほこがたなの手(て)で抜
くひと押へ右ばかりで大脇差(かたこさし)を抜(ぬく)庵いくと
もれど鞘(かび)がゆるくてそやが半分(はんぶん)ぬけて抜(ぬけ)さ
所の脇差(こさし)を鉄人をやが一尺八寸余(あま)り有(たる)庵、所(ところ)
で六人のかばかりで抜(うけ)て抜屋う折そのおさい
ど破(ろう)くおつこ抜(ぬけ)るさそし稽古(きんさ)いんる
ち傷あそし柄(つか)までが首(くひ)が落(おち)庵んは南無世(ぜひ)の
はやみはさら前(はの)がかし抜(はら)しめとくう、のさ

落(おちん)をさら前(はの)がゆる庵んなそらは常にえてあそ
早(さや)く鞘(さや)の庵いふのをとおもへども今かうしさや
て打(さうく)折をも抜庵ん此刀脇差(わきざし)絵(よう)をは
首のこれあがおもぶ捨(ゆえ)おい、まつ首ハ突(えくや)早つ
く庵んとおもほゆくう手にしいおん返(かへ)をゝ
銀拵(ぎんごしらへ)の逆輪(さかわ)一ッ所が脱(ぬけ)命(いのち)をうしな庵い
とらしく年(とし)のもぐ侍死のまり身なく(さん)
銀(ぎん)のおしへをつまなんはんなどいひか
さばるがむ(そうを)ならんぞ今ともひあまかる

銀拵の鑓ハ武辺しれ事があらバ金銀拵の刀脇差も味方に賊首をかゝるゝといふ訳ぢやによつて鞍や鐙まで金物までこしらへても見苦しい升だが刀や鑓の金物ハいらざる事さんぢや大将ハあつかひける又敵の馬が鑓疵を負て持国ゝつは好まぬと思ふさんの鑓をなぐさつてあるれバ右の目がおかしいと見ゆる兜角な物を一つ鑓にはいたましいかんさ疵つく鎧がいりさいハ馬上の鑓まで又さんな擦らへるると

おらしに付て武具ハはなやかにしないがよいぞ

数鑓担

助内、左様に

青内くも鑓のこじり鑓をかうしん鞘とはかなきあさましたさんな此さやハ持鑓のはやりめ鞘しなれ諸道具捨なやうに鑓のさやのちいさいを具足の胸板このまゝ長い鞘をば腰にさして置とおくぞ所の宿の持鑓ハ古さやをかへ胸板にふうさへの付て此の鑓に後家入にしてあるぞ

東都 書林 蔵版

よその備ではふりを見ても鑓のさやを捨ないやう
にと法度が有とこそ聞へ今のひの屋星
担が後生一大事に大鳥毛の鞘二つ鳥毛さや
をふたつける鑓担もあり縄で首に引
掛て背中にも首にもある鑓の中でのせいちろ
のさやを皆おちて鑓の穂先がむき出しいとん
ぐあ腰にさげ切屋いとして南無世鑓さんさやの
目くり主が馬をいやしいやゝ少なき大き
な鞘が何某の様にかゝ馬から下が流

貴をける遠へかゝりは走るとさいで鑓
つまりさる古鞘をせおはせ胴座とかけるなりけん
ものれも能事が有て大きな鑓のさやが
ちやうらふ合点がゆかないとて鬼をかくに鑓持
鞘は破れて捧とはなれて何も
このもはずをなしひが絵担の事をみたりはよふ
ござんなれ

籏指馬印持　孫蔵

もし浮風いと思ふ時ハ柄を上帯へはさんでもよく
持兼は押前が走て来て請筒にはさむべい
今日な風がひらりとしたれば手縄をかけて持べいが
己が持ふ旗ハいかにもしほらしくなったれバ馬下も
籏も一つに成たら孫あたりな長柄を持く
てきさへは実掛になるべい

馬印持旗差　広蔵

押前ハ志たる時ハ請筒によひが死ぬるやひ時ハ

柄を腰へはさんで持つ手によいがひとしほ早く
なつたれば旗をはんまいていつはしく居れ
敵を追崩し時ハ拵へて差たれバいなすのは
旗をも馬下も一所に孫兵衛が長柄を立べさせに
木をいわくよ此指旗をさせるに立つ射る袋の
中へ御旗流入て脊骨へ立つば必ず
して蝉口へ引くりて射る今一つは又脊骨で
ふみしまて其の端を揃ても懐に二つ入て置て一つ
とハ竿の先にかけて一つを脊中に引付て

持筒　筒平

鉄平く此おれて云はれ搆る鉄炮を自分でもつ
くるめいとは思ふ陣笠の中で筒を取て口薬
入ても首より云てからうけまい緒がよくわけて見形
の襟に引かく時にかく身の胴乱の緒を
よく結てまるのんでいと思つて一つ結へて
おんごの腰に引はさめてまづも膝もち
こくなるまいば此鉄炮引かけては足
元の衣筒の尻とかゝると気ん扱具足のみ

さて鉄炮をば腰へ引付はゆるくてはいとおもよ

持筒　鉄平

筒平くふしる云所ちかうなきことにし小志よれ
鉄炮を領て我が腰みどもこたきを請てろ持まて
来てひる鉄炮は膝にも申ことはなれその上
此鉄炮をはじきれさうく請取やる時に鉄炮を膝
に死たさむやうにちやく背中へ引付て持ち
いとうつひふる玉を取られては所く難儀しさいつそ
のうはふしとかく思ひ引うつざかへてはいと思ふよ

持弓　矢左衛門

御持弓といふものは数弓といふ覚悟が肝要だ
こんどで先御弓一張御矢一腰を旦那へいふが
が今一張と一腰はたとへ此数弓数矢に
後生一大事に構ていふぞ渡さずと
役にたたなんだものだ捨るといふと
うちひとつ玉人手拭をもて何とぞ背中
へ御持のひけ腰刀をさして働く事だ

持弓　矢右衛門

矢左衛門いつてく数弓ははちがつてこなんだが
自分の用にたてゝ射るはいよいよ不覚悟なんべい
あさふにおゐて死たりつらい事があるぞきかせ
旦那殿いふ張替の御弓御替矢たとていい
御まへても一揃これがいといふものは御侍衆の手
前の人があんだいふは此無器用なと言ぬ今一
張此御弓一腰の御矢を渡した旦那とふつその
時はままになるべい頼刀ぬいて自由がなる
おもふがあんと矢左衛門がいふだいふだいふ

草履取

袁六玄情

孫六ふしは挟箱を持るさまにて、やりを肩にの
ませさへ刀まく一本たきんにおまへてハ草履の
役りし又若おひあを頭にし孫六ハかひかこの徒侍
者まる刀脇差の指添を差すなんとなく扱ハおしひ
たきみやらしお歴々の侍元ハ具足の上に刀脇差
を指なさるか扱まきハ小脇差をかり指当をとも
はく刀抜引付先さふし孫六やおまへハ具足
着るか大きれおんの腰当なとハぬれなん此

座しおもくれ刀は具足のうへにさいてもて二尺
だいの刀を抜ぬかんとせば、おいつまりてさんざ
成りにさしあがりハ五六尺の刀も抜成ぬでなけれ
具足と云ふものハ抜て具足より先へ
刀脇差をさゝんて扨其後に羽織ば
きもやうに具足と云ものを日本国の人
数治まりて刀をさしたるに就ても云ふ也されば
事がなんとく当世ハ鍋釣のやうなものは、おしい
ものゝ様にてもなくとて皆磨く気も中間

流れものぞ、鉢巻のやうな刀は、さげる様の刀
と上帯に差して中く抜ぬいて所で敵をきつてハ
抜成がたきもの、せずぬるは皆ぬけるもの
所へ中どうとして手を切、又其刀をおとしい
ためしにふさものもあるし腰刀で身を切ことも
またハ具足の上を肘まてを切なとなるに
みがうけくにも何もなくて鎌が
ものゝ多くいけるなかで中に老人刀はぬけ
ぬいと思ふものをどうもならんもとくださるが

なりわたにあれ儀ハ浮死としめがおどろかせ
腰まきて脇差の実否とて抜へいくし
あまりが陣中ハ目ふ立けんさんぞとて大釜の
蓋ハ大鐔の金箔をぬすみけるその
ほもかつて縁よめりて抜の鞘ふうちにかすり
首をとりまて又壱人を細伏ひきまして抜とき
是ハ底心人ぞとてみえてをまへ陣ぐる夜ハと
て大きれ小刀を抜さんとしての鞘のうちを小刀
と雑ん抜て下段の胸の実こんなる林

逆しらのまくし鷹匠の名ぬかまするやうに
しくはし殺さ出れ刀を奥星の手ぬ指くさ
わ男は是壱人さ拵の外馬これよりて刀を破
み是ハ皆宗さるり切先を切付て負る
かほう得てたまらぬをさもられて掬鉤の座うれ
刀と小脇差ハ奥星ゆうへり指ていよるふべい
とおもふ鐔の雁ハ小柄を抜さしあらばたま
そいつ得ぬ持ん抜巨ハ又大きなる小刀をかびに
徳がある笄小柄をぬんど落しぬ附る鐔に立

屋のさんざ、弥六具足に上帯に大きなる脇差は
うしろへさしめさんな、さんざ様具足の差やうは
数ふをよひかけ知れぬやうにむさと馬の鞍を
にて具足を脱ぐ時にさげ〳〵に早く鞘をいぞ

挟箱持　弥六玄蕃

此度の御陣の供に挟箱を持せるさま一向
きつく首筋をさいつまと頭うちに二分脊骨を咋日
よりその挟箱持した人ごとにたびたびうめきをて
しろ挟箱をもち破らく中に道具はそふにけ

ござりまして剣さへもなんさくば、はさんて、洞に二所
平蜘蛛のやうにふんばりかさまて血屋どとてやく
咄嗟しゆきてもそれ〳〵はと〳〵といって
も杢延おまあにしもあ赤鼻を廻いとおいせつなき
めぐるに家中でも喧嘩口論の禁制ど
この半長陣を思ひおしておとしたまさ
はなて遠慮しまて家中てさく陣ハ
やにおよりた旅でも陣中の喧嘩口論そての
ぬしく此禁制たるはこのなは敵にあいなひて死

おらが時分ハ小牧陣の時分でござつたが一もんおくを上
存分に打取た首を所ながら持て廻らせたか
いたづらに他の人殺しとおもふかしめしと
者ハ余けい甚分しめといいて毎度寄せて
細腰さし役でござる物ハおのが腕骨や袖に取る
直に腰挟を又法度に聞かぬおきてさん兵ハ
敵一向に走て討たいひて他の人殺しと云
二寸も手を討ても忘れでハおひ其他の人殺しと
打果しても　御公儀様へも見もしての沙汰

ぎんミいたし角ハ他の讒言すてもおもひがよ
いさんざと思ておまへハ抜身にさし
あまり用もなし手業事雑有こんざきさう
刀ハ鍔だけ見ては抜がよく抜る
様に念を入おさくハ鍔元までもた
せ服の柄をおし江戸とおいた時あしかりつ
毎日しらべの金物にもくもくの柄
にしっかと切る命銭とぞ死ぬなどおもひ
の外にまはひこめ今に命が甘く持つること

旦那ハお旗本なる所で先手からはるかに遠くて
鉄炮もしく音を遠く聞えなんだが、さのみも出し
玉が来て飛で来るが小貫目計の玉目だらう
けが致まして鼻先へ当つて、はらはら致れひらず
飛つて来た跡な所で死るやうにおぼえてさせ申し
卒尓に今度あの持てもおれが柄糸の切てはまを
死ぬる時分雑兵ハ糸をまきてあるで候
とあるくへ脇刀を抜し今いさ当て迷惑で
抜し此刀の柄のぬくにしたらばいのち限りハ

にやふござるもの故今度一度来ていき当るあんと
まべいやおもひおりして眼差をあるまでござる
ないで行て討る所で柄が寸尺が一束さへ
なりの柄の細ひを行て討ちに夢ひぬる中ハ
満しめに糸をば引かどひく中心にけに柄を引
故矢藪のつるのつえに溜りのゆかりの出るでも
あんないは近完へ引直して二寸巻いてもあべい
と存ずる

馬取　　金六

は出陣の時は馬元といふものは武人の第一
にして其外道具はいふに及ばず馬も能く
鼻捻腰にさし引たてたる轡におもかひ手綱は
しはりて首に引つけ腹帯を縄力革に
むすびて其上に持たる馬を又馬にのせてむすびつけ
紐緒手に両通に筆と入る右の紐緒手に小手綱
請筒をまた引立御跡の四方手に左右に大筆
袋をはさけり前輪にくくりつけ胴乱くくりつけ結びめる

後輪に鞍肉の糒袋又は皆左右の紐緒手に入り
うけくうだいろうんやうに乗つかせ手綱をさし縄
粒をりはつけ先ぬく馬をすゝませるを小兵は
立関にのつてぬい物をも時噂をたてるげ
ちはを物なとこつげはおよその心引はあ渡なはち
くはまさと手綱を結びて後は初めに馬をとせてしるしと
からたちをもちて馬はとりてなりける
用心をしるは馬を止はたるものは大きな
はくさにちふおんくめちのよくぐは軍の負

かやうなる時はこゝろがひあみにて割楔なくてもよく引
付るなり是も念のためなれども所によりて鐙の代
わりに用ゐる也人なきときはかやうにも縄を持て
こしらひおくべし置所の縄にて鐙の一尺ほどの所に
その端を折りて附鐙とする也
又鞍覆もなくして代りに用ゐるなり
畳の敷草にてもあれさへあらば用ゐるべし
こま附の障泥をもつてなきときは人の敷物にしてもよし
持鞍の心得道具と大事にしろ

馬夜　　夜六

今夜の物語をきけば今思ひ出しぬる事のあるはまづ
馬まで七夜もたゝねばいまだにひとひの鹿毛の毛とも
ならぬにつけて耳の底に五六年もなきかいあるが
今思ひ合すれば昔陣中に其日の首を拾ひしが
敵の所の首をもちまして其と二三人ばかりを
討てそれよりやめにして敵が首ともつ
て一日二日も鬱々と陣にて其の跡を持ては
物をつかまへ思ひ出すもの人数の人は

乃人く隊の備が大衛門やうれ人間がもとて少し崩れまさ
亦来き騒り左崩れまして所徒て、大きに因彼沙りと亦
五六万の大軍が十日経ち程敗軍まさと度々追懸る事と
ありさ扣れるめが合六が馬に合と入るがたちまんじ廿日籠
一足ぐさん手丈のめに流しくや廿日籠のかつかた旦五百双
膳もつるへい馬を足まり程まぬん居いまりる五六万人乃
大軍が手自傍にも敗軍まく以様に西国のたてつし鉾
来まく崩まてても国が見ゆい大事は人のかし法
度にても馬とさうりとれさせやうに深く法制禁す唯

必ず合と入りく馬さん手の色総して陣中に小唄浄瑠
理などや物語を法禁制させも高声させまんと云ふ
とめもを殺にだいまとすると口にかぢるといふ付事
ざとは小首の五六万人か皆勝ぬ事ては首ゆいち
内ふ構が様の液ひ人去るもいつふ屈ハが其先き人
武人が法へいふ丈か大勢ふ無く浄ハ嫉とゑ事
ありりん為とゑく馬と能く少もれるよを
馬をきり見る時の先陣たる又旦那が馬は口鉄
引きなせ可きをそ附きあるもが陣ふなりて何も

引ぬくほどもあるは刀を一本さしたれバ殊に一丈も
敵と料理するも口惜いさんあるまいに五十人を
えくくきたが所々に疵を受て違てあのが今武
家の水とのんだ事ひ陣の陣中へ出んかけ熱しく
侍死と云ことんで討死して猶むと聞て合点めされた
死るというもんぞ唯これ孫八敵がひにいでゝかって徳
がいふなら味方ハ臆病神がついて退く疵をひくものはいくぞ
あんとして死ぬとも敵を一人なりとも殺を二人ハ
徳があるにおるへいぬくハ百人でもうつ殺せぬからで

骨身ハ坊主ぞ一人も切ぬ事まで命ガ拾はハ臆病
ものでござる孫八今迄の技持方が失墜に成ては
よく合点せし給

沓持 吉六

是はちやは沓籠持ながら、さむらひにて沓袋を持たせ、やれあの様し身の働きも自由自在になるやうた無慶かも武道ハまけや満ゆと思ひなれ剣さへ刀を一本も持たさんぬ様にあんする事もなし。色ハとおりつつ能おりへは武辺より是馬の草鞋れんやうにする絨綱やがかまて武辺の事てる此馬を今朝野合戦で退て納くいつ半時ちやあおまてえ今が肩めや敵は退つちやう

さみやうたがひに骨折さ様ぬ大豆もかひもくいれうぞん腹のをけるも擽なんのうて世へいら一度こ多くか流めハウならん色いば極れ時分ハちつくりく切ににあつく横も立ば給て也きうおおれう急ひ我し如七ぬハ坊主草外く用か立ぬれもん沖さよその沓籠持をもあ小抑く次第ハ左膝をこんぬ水沓籠とかいつくゐるうちハ敵がくて首をきされくかしハ成ろまん此中れ押前か其の姿く馬を一疋さらつて馬屋も宗くもはちとなりして

まはめさず一切おかしい事なれバ厩の馬まで
ほたへ狂ふ其時皆籠持めが馬の中にたをれ伏て
始終の事ハ夢しに米が中満ちて更にかつて皆
籠がある其尻路へ当て櫂馬どもがさ舞ひあがつ
た所で埒が事が済ぬ剣させ給んで米籠をぬ
ち破つて事おハ手明て居ぬ様はそのやうな時
まだ夜六や今も夜のまへにに事まで御座れ

雑兵物語上巻終

国立公文書館
National Archives of Japan